

山に親しみ山に想う (2)

— なぜ山に登るのか —

<文・写真> =岡本=

イギリスは国家の威信をかけて、エベレスト初登頂を達成すべく遠征隊を派遣した。1921年に本格的な登頂のための準備偵察として第1次遠征隊を、本格的なものとして1922年に第2次遠征隊を、1924年に第3次遠征隊をエベレストに派遣した。マロリーはこの3回の遠征隊に参加した。遠征隊に対し、大英帝国のインド官僚機構と陸軍が支援した。

第2次遠征隊は3度頂上をアタックし、マロリーは第1次と第3次のアタックを率いたが、失敗した。第3次遠征隊の際は、第1次アタックに失敗して、第2次アタックをかけた。1924年6月8日12時50分頃、若いアービン(享年22歳)と共にマロリー(享年37歳)は、サポートの同僚が頂上付近の岩に取り付こうとしている二人の姿を見たのを最後に、雲が山を覆い視界から消えた。二人の下山はなく、マロリーとアービンは6月8日か9日に死亡したとみられる。二人の追悼式は、10月セントポール大聖堂で国王ジョージ5世も列席して国葬規模で挙行された。マロリー遭難死から約30年後、1953年5月イギリス隊のメンバーでニュージーランド出身のエドモンド・ヒラリーがシェルパのテンジン・ノルゲイと共に漸くエベレスト初登頂を果たした。

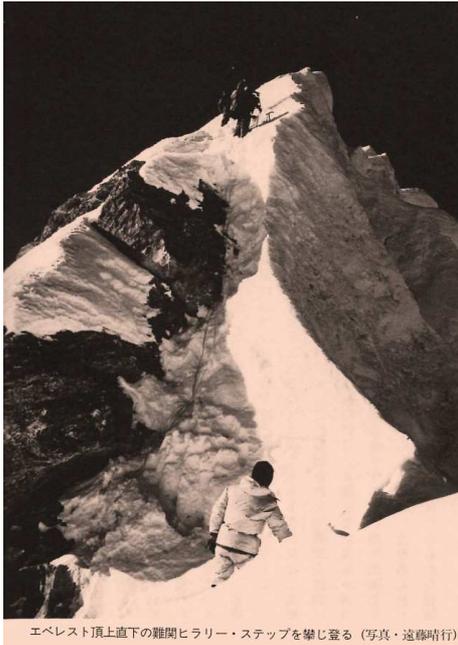


フォト① 遭難の2年前、8170m地点を登るマロリー(左)
／武田文男著「冒険物語百年」朝日文庫刊より

マロリーの死から75年経って、1999年5月1日にマロリー・アービン調査遠征隊によってエベレストの北面8160メートルでマロリーの遺体が発見された。俄然、マロリーは世界初の登頂を果たしたのか、何故死んだのかが取り沙汰された。調査遠征隊は多くの資料を得たものの、山頂に達したか、達しなかったか、両方の確たる証拠は無いというのが結論であり、「マロリーとアービンは頂上アタックで遭難死」という以外不明のままということのようである。

「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」によれば、「インドへ発つ直前にマロリーから胸の内を明かされた友人のジェフリ・ケインズがこう回想している。—彼は私に言った。自分が直面しなければならないのは、冒険というより、むしろ戦争だ。生きて帰れるとは思っていないと—」と死をも覚悟した出征の心境にあったといえる。国を挙げて第三極を征服するとのピリピリした雰囲気の中で、優秀なクライマーとして評価され、ただ一人3回の遠征隊に参加した

第3次遠征隊の登攀隊長のマロリーとしては、自分がやらねば誰がやるのだという決意であったであろう。年齢的にも37歳で些かトウが立っていた者として次の遠征隊参加は望めないかもしれないという予感もあったであろう。マロリーには万に一つの登頂の可能性があれば、頂上を目指すアタックをせずして途中退却する選択肢はありえなかったと思う。その結果としての遭難死であったろう。では、頂上をアタックし、頂上を極めた後の復路で遭難死していたとすれば、これをどう評価すべきであろう。思うに、登頂とは頂上を極めた後、生還してこそ登頂成功と言えよう。マロリーが頂上を極めても、下山途中に遭難死したのなら登頂したと称するべきではないと思う。日本人初の14サミッターの竹内洋岳は、「登山の哲学 標高8000メートルを生き抜く」の中で「頂上は山登りのゴールではない。無事に下山して、はじめて登山は完結します。」と言っている。



エベレスト頂上直下の難関ヒラリー・ステップを攀じ登る (写真・遠藤晴行)

フォト② 遠藤晴行撮影・頂上直下のヒラリーステップ／上村信太郎著「エベレストで何が起きているか」山と溪谷社刊 より

「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」は、マロリーの人物像の一端を次のように書いている。「マロリーは非常に神経質なタイプだった。登っている姿をみていると…その動きの滑らかなこと蛇のごとしだ。マロリーは登山家として際だった能力をもっていたが、管理能力はゼロだった。目の前に課題となる登攀があると、それに集中するあまり、けっこう大事なものを決まって忘れてくる傾向があった。例えば、登山靴とか、コンパス、夜間用のランタンなどというものもあった。こう友人は述べている。」

「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」は、エピローグで「何より貴いことは、私たちの注目が当然であり、私たちの畏敬が当然なのは、二人が、与えられた諸条件のなかで、あれだけのことを成し遂げたことであり、二人の驚くべき体力と度胸、おのれの希望に対する不屈の精神なのである。

1924年6月8日に世界の最高峰に二人が登頂したかどうかというより、そのことこそが、マロリーとアービンの物語を貴いものとしている。」と結んでいる。

<参考資料>

- ・「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」ヨッヘン・ヘムレブ、ラリー・A・ジョンソン、エリック・R・サイモンズ共著、文藝春秋 1999年12月刊
- ・「登山の哲学 標高8000メートルを生き抜く」竹内洋岳著、NHK出版新書 2013年5月刊